

入所にあたって

瀧 章次

このたび、プロジェクト「古代キリスト教とヘレニズム思潮」の研究者として2年間研究を進めていく機会に恵まれましたことに感謝いたします。これからの2年間どのような途が披けてくるのか、未だあしどり不確かなものですが、一切をゆだねる信仰と出発点へと倦むことなく問う志との間にあって、少しでも行く途筋が明るくなればと願っています。

今まで、ソクラデスに関わる文学、とりわけプラトンの対話篇を中心に古典学を学んできたことを顧みると、「キリスト教」を「研究する」こととさほど遠いところにはいなかったとも思われるのですが、ついぞ対象として真向かうこともなく、聖書を繙くにしても、折々の歩みにおける、稚拙な己の所感と密接になっていたと思い返されます。といって、この機会にこそと、意気込んでも、一歩離れて考えれば、質量共に古典の比ではない聖書研究に直ちに入っていけると思うのはおこがましいこと明かです。ただ何か違って見えてくるかも知れないと、入所が決まってから、休みの間、自分勝手な入門として、W. イェーガーの「パイデイア」という考えを手引きに、「ヘレニズム」を考えてみようと思い、「ヘレニスト」の働きを考える為に「使徒言行録」を読むことを課題としました。やってみて、早くも文献学的集積の重量感に圧倒され、実証的な貢献をしようとしたら死ぬまでかかっても何か新しいことなど言えないのではないかという気がいやまじに募ってきた折り、入所の日がやってきて、早速鍵を頂いて研究所の居心地を確かめていた所、いままで使ったことのなかった聖書の電子集積資料があるのが目に止まりました。好奇心からあれやこれや使い勝手を試しているうちに、新約では懐疑派の術語は見たところ否定的な文脈におかれていることが検索から直ちに予想できたり、そればかりか、ソクラテス

を故郷とする *suzetein* や *dialegesthai* に、それぞれ「共に探究する」や「対話する」と、前4世紀の意味を単純には当てはめることがままならず、「70人訳」まで己の不明を後押しし、おまけに、「使徒言行録」では、ステファノとあるいはパウロのギリシャ、小アジアにおける宣教とのみ結びついていくという新たな謎までついてきました。なぜそのような意味に変わっていったのか、どれほどセミティズムの影響があるのか言語的な興味は尽きないのですが、事柄としてどこまで内側から照らし出すことができるのか、産みの苦しみの最中です。

一方、英国のダラム大学に提出した修士(M.Litt.)論文に引き続いて、プラトンに関する継続的な研究としては、19世紀以降の読み方に対して、自分の読み方を位置づけるだけでなく、今度は、古代においてどのように読まれていったかを検討していきたいと考えています。プラトニズムの端緒を辿ると共にプラトンの原像を画定するという大きな課題のうち、とりわけ、ディアレクティケー(対話術あるいは弁証術)というものがどう捉えられていったかがいまの大きな関心事です。

(たき あきつぐ

キリスト教研究所研究員)